



屋外にベッドを並べた仮設の診療所
11月2日、ネパール・バグマティ県(長崎大
提供)

長崎大 山本教授 ネパールから帰国

余震続き屋外で治療



山本太郎教授

ネパール大地震の緊急医療支援で被災地に赴いた長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授(51)が12日、長崎市文教町の同大で帰国報告会見を行い、現地の医療状況を説明し

た。

山本教授は国際医療援助団体「AMDA(アムダ)」(本部岡山市)の一員としてネパール入り。ヒマラヤ山麓のバグマティ県カリチョウの病院に設置した仮設診療所で1日から4日まで、治療が円滑に進むように現地の医師や看護師の手助けをした。

教授によると、地面が震えるような強い余震が続き病院内は危険なため、屋外にベッドを並べて治療。電気と水道は使用可能で、医薬品の不足はなかった。患者は1日約70人。骨折、打撲、切り傷が多く見られた。

教授は「非常に広範囲の地震」と印象を語った。「患者は山道を4、5時間かけて歩いてきたり、担架で運ばれてきた。さらに奥地の被災者は診療所に来られなかったのではないか」とし、「今後も接ぎ目のない支援が必要」と訴えた。

(松尾潤)